

小話：海外ロングステイの
人間模様 @チェンマイ

川本雄二

— 目次 —

1. プロローグ

龍と次郎の再会

2. あこがれを追い求めて

語り始め

タイ人と結婚して5年、そして彼は失踪した

放浪の果てにチェンマイに根をおろしたスウェーデン人

夫は確信犯

ベスト カップル

3. 女遊びこそが人生

玉本のように生きたい

チェンマイよりもミャンマーがいい

4. 帰りたいが帰れない

日本に帰りたいと思った事もあった

夜逃げ先がチェンマイ

5. アリバイ作りと言う大嘘

山岳民族を支援するためにチェンマイへ

貧しい学生を支援する里親

6. エピローグ

別れ

龍と次郎の再会

『龍さんじゃないですか?!』

次郎は隣のテーブルに着いた男に話しかけた。

『ん?。。。。』

『あ!次郎か!!』

『そうです!』

龍と次郎は8年ぶりに、タイのチェンマイという異郷で再会した。

8年前まで、龍はいわゆる業界紙を運営していた。次郎は龍からの依頼を請ける調査やフリーライターの立場で、仕事上でも、プライベートでも、二人は親密な関係にあった。

その後、起こった様々なトラブルの結果として、龍は日本を脱出して東南アジア各地を放浪した後、チェンマイにたどり着き、早や7年が経過していた。

龍は元々英語が話せ、タイ語も習得したため、現在は日本人居住者向けの真面目なよろず相談業が軌道に乗って、チェンマイで食っていくには困らない程度の収入を得ながら、それなりに生きていた。

一方、次郎は、その後も日本で業界紙のフリーライター業を続けていたが、趣味の海外旅行が高じて、海外での体験などを基に、ルポを書き、雑誌社などに持ち込む活動も始めていた。

そんな二人が、8年ぶりにチェンマイのタイ・レストランでバッタリと遭遇した。

二人は、この間の空白を埋めるべく、深夜まで、チャン・ビールを飲みながら語り続けた。

『そうか。次郎の仕事は順調だったんだな。俺は、察しのとおり、裏社会のビジネス情報に踏み込んだのが運の分かれ目だった。いまだに、日本には帰る気にはなれないし、帰れない。』龍は、大きなため息をついた。

次郎『龍さん。でも、元気そうでなによりですよ。ひとつ、お願いがあります。7年間もチェンマイに居れば色々な人間模様を見てきたでしょう。その話を聞かせてくれませんか。生々しい人間模様を是非、記事にしたいんです。』

チェンマイでのこの再会が、これから始まる物語の出発点だった。

語りはじめ

次郎の希望を叶えるべく、龍は首を立てに振り、7年間の彼の体験を話すことにした。

翌日、二人はチェンマイ郊外にある閑静なレストランのオープン・スペースの一席に居た。

『さて。何から話そうか。』と、龍。

『思いつくままでいいですよ。』と、次郎。

龍『そうだな。。。若いタイ女性に手玉にとられて大金を巻き上げられて、ダマサレタ、と騒いでいる日本人の老人の例は五万と有るから、この手の話は面白くないよね。周りから見ても、このカップルはうまくいってるな。と、思っているけど結局破綻した例でも話そうか。』と、龍が次郎を見る。

『お願いします。』

『じゃあ、理解を助けるために、この手の話のバックグラウンド的なところから。』

龍の話が始まった。

『チェンマイには、日本人、欧米人を問わず、若いタイ人女性と一緒に暮らしているシニアが腐るほどいる事は知っているよね。でも、長期間、ましてや、彼が死ぬまで添い遂げるケースは、実は少数派なんだ。まず、一般論として、日本人が相手にしているタイ女性と、欧米人が相手にしているタイ女性の違いについて整理しておこう。』

これは、あくまでも、ざっくりとした一般論だけれど。

日本人相手は、キャディーやマッサージ師など、どちらかと言えば、学歴も無い生活困窮派が多いんだけど、逆に、欧米人相手の女性は、学歴もあり、英語がしゃべれるインテリ・タイプがそれなりに居るんだ。タイと言う国は、かなりはっきりとした階級社会であって、職種で言えば、キャディー、マッサージ、ウエイトレスなどは典型的な下層階級と言える。もちろん、これは一般論だから、これから外れる例は勿論あるけれどね。まず、このあたりのバック・グラウンドが色んな謎を解くひとつの鍵かも知れない。』

次郎『そうなんですか。』

龍『この辺の違いを、もう少し補足してみよう。タイ女性のインテリ派は比較的独立心が旺盛で、彼と同棲していて経済的援助を受けていても、働いているケースすらある。また、英語ができるから、彼とのコミュニケーションを十分取れる、というような生活基盤がしっかりしているのが重要なポイントだと思う。彼女が金だけではなく、ある種、彼の人間性全体に対して信頼感を持っているな、という感覚が、彼らと付き合っていると肌で感じられるケースもあるんだ。もちろん、裏も有れば、本音もあるし、、と、考えた方が実態に近いとも言えるけれども。』

一方、日本人は、と言うと。生活困窮派であるタイ女性が彼に求めるものの第一番は当然、お金

。

金の成る木が出来たとなれば、一族郎党の金銭面でのめんどうも自分がしょって立つ、というような肝っ玉母さんに豹変するんだよな。

しかも、お互いに共通言語が無いから、コミュニケーション能力という意味では、お互いがハンディーを持ち続ける事になるんだよ。本質的な信頼関係構築にはほど遠いような関係のカップルを一杯見てきたよ。

このように、欧米人と日本人のケースを比較すれば、何故、日本人シニアとタイ女性のカップルの多くが、悲喜劇を演じた末に終幕を下ろしてしまうのか、の謎が解けるような気がするんだ。』

次郎『でも、それは、龍さんが付き合ってきた欧米人達が、たまたま、まともだったからじゃないですか？』

龍『うーん。そうとも言える。いかれた欧米人も少なからず居るからな。

主に、プロの女性を相手にして、手当たり次第に遊ぶ、というような欧米人は、この際、論外としよう。

長年、チェンマイに住み着き、特定の女性と暮らしている欧米人の実態と、多くの日本人シニアたちが大金を巻き上げられて、ダマサレタ、ダマサレタ、と言っている実態とを比べれば、かなり違うかも知れない。』

タイ人と結婚して5年、そして彼は失踪した

龍『さて。最初の物語の主人公は当時50代の日本人男性だ。

彼は、日本で現役だった頃は、婿養子として、婿入りしている家族が経営している工務店で社員として働いていた。奥さんは、その家の一人娘でしっかり者。子宝に恵まれ、1男1女を設けた。でも、婿養子の宿命なのか、彼にとってその家では居心地が決して良くなかった。そういう環境だから、生来の遊び人気質の彼を大人しくさせるはずもなく、フーテンの虎さんよろしく、ブラリと出かけると家に帰らないというようなことは珍しくなかった。

そのうちに、フーテンが高じて、彼は海外遠征まで始めた。そして、チェンマイに流れてきて、その良さに、すっかり、はまってしまった。その内、知り合った現地の女性と馬が合い、同棲が始まると、もう日本に帰るモチベーションは無くなった。

彼の場合、婿養子と言っても、養子縁組まではしてもらえなかったため、財産分与を受ける権利が無い。つまり、本当の意味での家族とは認められていないという弱い立場にあった。言ってみれば、種付け馬みたいなもの、と言えなくもない。これが彼にとって日本への未練を断ち切る決定的な引き金となってしまった。

”遊び人には給料など払えない”、と最後通牒を言い渡されたタイミングで、彼は何の躊躇もなく、離婚手続きを済ませると、片道キップでチェンマイへ再び渡った。

その後、彼は、チェンマイで、そのタイ女性と結婚した後、俺に豪語してたよ。

”若いタイ女性と暮らしても、長期的にはうまくいかないよ。” と。

”自分の場合は、年齢差がさほど無いので、上手くいっている。”らしい。

確かに、彼女との年齢差は、15歳位だったように思うな。

60歳後半の爺さんが20代の女性と一緒にいるのに比べれば、確かに、まとも、なのかも知れない。

でも、その5年後、彼は、奥さんに、”1週間、日本に帰る。”と言ったまま、ずっと、チェンマイに帰って来ていないんだ。タイ人の奥さんは、当時、狂ったような大騒ぎだった。

彼は、メール・アドレスさえも、消去したため、当初、俺も連絡の取りようがなかった。

振り返れば、彼から色んな話を見聞きしていた。。例えば、

仲間達と食事に行った時、奥さんが同席していて、清算の時に彼女は、”いいから、いいから、私が全部払うから。”なんていう、のりだった。でも、それって結局、彼の財布から払うということだから、ハイそうですか、となる訳ないよな。彼の奥さんは、まあ、そういうタイプの女性だったんだ。

この彼女のスタンスは、一族郎党のためとなると、なおさらエスカレートした。

怪しい話、つまり、この話は”タカリ”だと分かっている、彼女はOKして、彼に出資を促す。彼も、”まあいいか。”と、事の真偽を確かめもせずに金を渡す、ということが次々と起こっていった。言葉の障壁があるため、なかなか十分なコミュニケーションも出来ないし、奥さんが、”しものもの言わずに払ってやりなよ。”という様子だと、彼も従ってしまったようだ。

そうなる、一族郎党達はどんどんタカッてくる。これが繰り返される。

例えば、奥さんの親戚が、サラ金地獄になって、高金利で火達磨になっていたのを救ってあげた、という話を聞いた時、俺は、”借用証書のような証拠を確認したのか？”と聞いたけれど、答えはNoだったよ。その後、第2、第3のサラ金被害者が登場して、その都度、助けたらしい。また、”養豚業をやりたい。”という親戚にも出資したらしいが、その後、失敗した。とのこと。理由は飼料の高騰で、赤字になった。ということらしい。この話とて、彼自身は実態を把握していなかった。

あるいは、オートバイの販売、修理業への出資話にも乗った。でも、この商売も甘くないようで、ローンの回収もできず、バイクも戻らない、なんてことは日常茶飯事。1年も持たずに破綻。

また、田舎のお母さんが病気した、爺さんが死んだ、の類は日常茶飯事。とにかく、いろんな、お金ちょうだい話が、いどこ、はどこ、からも、一杯、持ち込まれた。

彼も、こんなはずじゃなかった、とは思いつつも、日本円に直せば、1件あたりの金額が莫大ではないため、最初のうちは、”まあいいか。”と諦めていたんだな。でも、こんなことが延々と繰り返されると、凄い金額の出費になっていった。

この奥さんは男勝りの性格で、豪快に金を使い、親族郎党にも大盤振る舞いをする。彼が盲目的にそれをバックアップするもんだから、そのうちに市会議員に出馬する、なんて言い出した。そんな折り、彼女は、彼以外の男を作った。羽振りの良い女だから、色んな男どもがまつわりついてくる。タイの男性が複数の妾を持っているのは珍しくないけれど、その逆のケースもあって、彼女は正にそれ。

そうこうしている内に、彼の場合、もちろん奥さん名義で家を新築しているし、何年間にも及ぶ、あれやこれやのタカリの積み重ねの結果、おそらく、それまでに、2千万円くらいの資金を、費やしてしまったようだ。

そして、結局、結論は、突然の失踪。

彼女の新しい男については、彼公認で、同じベッドで3人で寝ていた、なんて言うマコトシヤカナ噂もあるけれど、彼の性格を知っている俺には、この一件が、最後の決断につながったと思っている。

”年齢差が40歳のような、いびつな関係ではない。”と言っていた彼ですら、この結末なんだな。』

次郎『そうなんだ。こんなはずじゃなかった、とは思いつつも、ズルズルと金を出し続ける様子が良く分かりますね。。ところで、彼とは、今も連絡がつかないんですか。』

龍『1年間ほど連絡が付かなかった。でも、その後、ひょんなことから、彼がバンコク郊外の海辺シーラチャに居ることが分かり、連絡が付き、最近、彼のその後の話を聞いたんだ。

彼は、失踪当時、チェンマイに持っていたコンドミニアムなどの資産を全部処分して、シーラチャに移動した。当地には、工業団地があり、日本人駐在員も多く、その中に旧友が居たため、彼を頼りに訪ねたらしい。海辺に近いため、新鮮な近海ものの魚が美味しく、日本料理店も多く、気に入ったようだ。今は、特定の女性とは暮らしていないが、結構、楽しそうだったよ。

チェンマイでの出来事については、あまり多くを話さなかったけれど、概ね俺の見立ては正しかったようだ。奥さんやその親族達とのコミュニケーションがうまくいかなかった事は、後になって振り返れば、やはり大きな問題だったと自戒していた。』

次郎『そうですか。。。でも、この奥さんて、悪人ではなさそうですね。』

龍『そうなんだよ。俺もそう思う。彼をだまそうなんていう気は無いはずなんだ。自分は、こんなに素晴らしい旦那を見つけたんだ。皆にもその恩恵を授けたい。と言うような乗りかな？』

次郎『なるほど。。でも、そんな大事な旦那を差し置いて別の男を？』

龍『まあ、言ってみれば、日本人が思い描く良妻賢母像を基準に置くと、こちらは異次元の世界、と言う事かな。』

放浪の果てにチェンマイに根を下ろしたスウェーデン人

龍『次は、欧米人の例を話してみようか。』

次郎『お願いします。チェンマイには日本人だけではなく、欧米人のリタイヤ組も多いですね。』

龍『そうなんだ。米国、欧州、オーストラリア、と世界各地から来ている。彼らにとっても、ここは魅力ある土地のようだ。日本人のリタイヤ組で英語を話せる人は少ないけれど、彼らは当然、英語が話せるから、ごく自然に英語を話せる女性と付き合うようだ。もちろん例外もあるけれど、この出発点の違いは大きいと思う。さっき、タイは階級社会と言ったけれど、英語教育をしっかり受けて、英会話ができるタイ女性は一般的には中流以上、と見てよい。

今から話すエルというスウェーデン人のケースも、成功例とは言い難いけれど、前の日本人のケースとは少し違うと思うんだ。結果はどうあれ。

彼はイスラエル出身のユダヤ人で、スウェーデンで長年にわたり、ビジネスマンとして働き、なんと52歳で早期リタイヤした。おしゃべりが大好きな、一見おだやかな爺さんだった。彼はリタイヤ後、何年も世界中を旅行して周りながら終の棲家を探し回った結果、チェンマイに決めたと言い、孫娘のような若い奥さんと一緒に暮らしていた。

スウェーデンといえば、世界でも有数の福祉大国だと思っていたら、実態はそうでもないらしい。老人介護施設は姥捨て山の様なところで、年金の金額もお粗末らしい。俺が彼に最初に出会った時は、すでにチェンマイに11年間も暮らしており、奥さんとは、彼女が18歳の時に結婚した。俺が初めて会った時は、彼が70歳、彼女が25歳だった。

彼はスウェーデンの豪邸を売った金でチェンマイの高級コンドミニアムを6軒買って、その1軒に住み、5軒を貸しており、他にも、欧米人の持ち家の管理を任されており、要は不動産屋として生計を立てていた。もちろん、不法就労なので、表向きはタイ人のスタッフを雇って、本人は裏で操っていた。奥さんは、俺が最初に会った頃は、チェンマイ大学大学院の美人の学生で、色っぽい美人というよりも、知的で、クールな印象が強かった。もちろん英語はとっても堪能なお嬢さんだ。

彼はタイ在住の大先輩として、当時、俺にいろいろな話を親切に語ってくれた。なかでも、印象に残っている話を少し思い出そう。

彼が影響を受けた映画のひとつが、日本映画、それも黒澤明の<生きる>だと言っていた。これには驚いたよ。これは、1952年に製作された映画で、医師から、余命6ヶ月を宣告された主人公の最後の生き様を描いたものだ。彼は、”そういう生き方がしたいし、してきた。君にも、そ

ういう生きかたを薦めるよ。”という話だ。

”人は半年後に死ぬかも知れない。もしもそうだとしたらどうするのかという発想で生きなきゃな。”

”些細な事になんかこだわるな。悠々と生きようぜ。”

”いい友達を作ることが自分に残された人生の目標の一つなんだ。”

と言うような調子だ。

この最後の目標の話は、彼の人生の状況をととても良く表していたし、しかも彼は最後まで、これを達成できなかった事が、後になって分かったけれどね。

ユダヤ人とのお付き合いは初めてだったけれど、ユダヤと言えば狡猾な商売人だという先入観を、彼に関しては、かなり払拭されたな。

彼とは、実は結構、色々な話をしたんだ。

例えば、チェンマイのリタイヤ組の日本人男性の話を持ち出すと、彼はよく理解していて、車とか、場合によっては家まで買わされて、捨てられてというパターンが常態化していることを彼は熟知していた。

でも、彼の場合はどうなんだろうか？と思い、

ならば、”あなたはどうなの？”と水を向けた。

すると、”彼女とは、もう7年も一緒なんだ。彼女はチェンマイ大学の大学院まで行って、恵まれた環境で生活をしている。”と力説していた。

でも、”本音では、彼女はあるが早く死んで欲しいと思っているのでは？あなたが死ねば、莫大な財産が彼女に転がり込むよね？”と、ズバリ、聞いてみた。

彼は”財産についてはその通りだ。”と。

”ところで、7年前に知り合った頃、彼女がせまったのか、あなたがせまったのか？”

と、しつこく聞いた。

彼は”私が好きになった。今も妻を愛している。”と。

”フー—ん、じゃあ、彼女はあなたのことをどう思っているの？”

と、追求の手は緩まない。

彼は、しばらく考えた末、”実は私は、この年になるまで、女性というものがいったい何を考えているのか、未だに理解できないのよ。”と、正直に答えたのには驚いた。

若い奥さんを愛してはいるものの、本音では彼女の真意を図りかねているようだったな。俺の印象では、彼の奥さんはお利口さんに見えたな—。じっと我慢していれば、なにせ、年齢差が45歳もあるんだから、時が解決してくれる。とでも思ってたんだろうな。当時、彼女はまだ25歳だったからな。もう少し我慢すれば、彼の財産はすべて手に入るんだから。

その後、しばらく、会う機会が無く、時が過ぎただけけれど、その2年後に、偶然、彼と再会できた。その彼との再会は、チェンマイ・ラム病院の外来受付の待合室だった。俺は、彼を見つけて、すぐに近づき、”エル！”と、声をかけた。でも、彼は全く反応しなかった。

何か、眼が虚ろで、あらゆる方向を向いていた。代わりに、同伴していた彼のコンドミニアムのスタッフが、なつかしそうに俺に対応してくれた。彼に、どうしたのか、と聞いたところ、血液検査だという返答が。明らかに、それは嘘に違いない。しかも、あの奥さんが、同伴していない。

彼は、いわゆる認知症のような症状なのかも知れない。でも、表情は明るく、不幸な人には見えなかった。その時は、その程度にしか思っていなかった。。

ところが、これには、後日談があった。彼はドラッグの常習者だったんだ。

これが、彼の人生の最後を悲惨にしてしまった。病院で会った時は、実は常習が行き過ぎて、少し危険な状態になっていたようだ。

今は、奥さんが彼のビジネスを引き継いで切り盛りしている。

欧米人で薬に手を出しているチェンマイ在住者は、珍しくはないけれど、彼もその一人だった。あんなに若くて綺麗な奥さんと暮らしながらも、ドラッグに走る姿は、彼が根本的には寂しさを持ち続けていた姿とダブルんだ。

今、彼は廃人同様の恍惚の人となって、メイドに面倒を見てもらっている。

そして、彼女は、今は同じコンドミニウムに住む韓国人と同棲して、子供も作り、幸せ一杯といった所だよ。彼女は、元々、子供を欲しがっていたけれど、エルは子供を拒否していたからね。しかも彼女は経済的にも益々、左団扇だからね。

でも、彼の場合は、不幸か、と言え、どうかなー。このまま死んでいっても、奥さんが最後は骨を拾ってくれるし、きっと幸福感を持ってあの世へ旅立てるだろうな、と想像してるよ。』

次郎『ウーン。そうなんですか。。彼女のクールさと、彼の一目幸せそうで、実はそうでもない、という微妙な雰囲気伝わってきますね。』

龍『客観的に見れば、身勝手な爺さんと、クールで利口なお嬢さん、との組み合わせという所かな。でも、この二人のケースは少なくとも日常はコミュニケーションは十分とれていたし、彼は彼女の家族とも良好な関係を維持していた。前の日本人とのケースとは随分違うと思う。

でも、根本的な所では、彼女との愛は無く、付き合い始めた当時は18歳だった彼女に、結局は思いのままに躁られた、と言えなくも無い。日本人ケースのような性急な金たかりではなく、じっくり時間をかけた周到な戦略とも見える。そういう意味では、質は違うとは言え、結局、両ケースとも、結果だけ見れば同じかもな。』

次郎『うーん。その若いお嬢さんは、ちょっと怖いですね。後ろで糸を引いていた人が居るのでは。。』

龍『実は、俺もそう思うんだ。彼女の母親は24歳の時に彼女を生んでいる。つまり、彼女が1

8歳だった時に母親は42歳。母親が当時18歳だった若い娘に、噛んで含めるように、その長期戦略を授けたというのが本当のところ、と言える気もする。今は我慢の時なんだ、と。タイ人を馬鹿にはいけない。したたかなもんだ。』

次郎『なるほど。』

夫は確信犯

龍『次は日本人の女性の例でも話そうか。』

次郎『日本女性も、それなりにチェンマイで見かけますが、シビアな事例があるんですか？』

龍『有るんだ。それも一杯。リタイヤ後の亭主を日本に置いて、単身でチェンマイに来る女性は、まず居ないけれど、夫婦で来るケースは有って、それも年々増えてきている。ところが、この場合でも、亭主がタイ人女性と出来てしまって、あこがれの海外ロングステイも破綻。なんていうことは、珍しくもなんともない。そのほとんどの場合は、奥さんが帰国。亭主が女と同棲という結果になっている。

要は金が目当てのタイ人女性にとっては、男が独身であろうが、妻帯者であろうが、お構いなし、ということ。』

次郎『なるほど。要は金がすべてだと。』

龍『そう。それじゃ、その中でもシビアな事例を話そう。

彼女の夫は製造業の技術者で、海外駐在経験も有り、リタイヤ後は生活コストの安い海外に移住したいと考えていた。総合的に判断すれば、チェンマイが最有力候補地だと考え、リタイヤ後に準備を始めた。

彼は英語は少し出来るけれど、タイ語は出来ないため、まず、チェンマイにタイ語留学のような形で単身で何度か渡航してタイ語を勉強していた。また、資金面では、移住する前に自宅を売却して、退職金と合わせれば、かなり潤沢な資金準備を整えた。奥さんも夫が現役だった時に海外生活経験が有り、しかも子供に恵まれなかったため、夫のリタイヤ後に、彼に付いていくことに抵抗感は無かった。このような事例は、実は少なくないんだよ。』

次郎『なるほど、有りそうな事例ですね。でも、これがシビアな例なんですか？』

龍『そうなんだ。問題は彼が事前準備としてタイ語を現地で習っている間に、若いタイ語の先生と出来てしまった、ということなんだ。彼はそれはそれは本気で、彼女に溺れてしまったため、後戻りする気は全くなく、そのまま奥さんを道ずれにして移住を強行してしまった。』

次郎『エー！ マジですか！ これは罪深いですね。正に確信犯だ！』

龍『そうなんだ。日本の住居を売却して、退路を絶った上での強行だから罪深いよね。奥さんは泣きの涙でそのタイ女性と別れるよう懇願したけれど、亭主は動じない。そんなこんなで、大騒ぎの結果、日本に帰り場所の無い奥さんはとりあえず、チェンマイで別居のかたちで暮らした。

海外ロングステイも、日本に帰る場所があれば、何時でも帰国出来るけれど、退路を絶つことのリスクの大きさを、この例はしみじみ教えてくれるよ。

でも奥さんは、ひょっとして、時間が問題を解決してくれるかも、との淡い期待を持ちながら、しばらく、この形でチェンマイで暮らした。しかし、事態は一向に好転しない。

そこで、次々と作戦を考え、実行に移していった。まずは、相手の女を交えた3者協議での対決。ところが、結果は惨憺たるものだった。タイ人女性の方が見境もなく、奥さんに突っかかってきて、コップの飲み物を奥さんの顔にぶっかけたり、果ては取っ組み合いの喧嘩にまでなってしまう、亭主はオロオロしながら仲裁するのがやっと。しかも結果は変わらない。正妻と日陰者のような、互いの立場を前提にした麗しい日本の伝統美?とは程遠いよな。』

次郎『なんと!』

龍『それでも、彼女はくじけなかった。次の一手は、親しい友人達に相談して、彼らを支援部隊として、亭主に対して色んな圧力をかけ、翻意を促した。でも、結局、この手も失敗。何を仕掛けても駄目だった。

そして、最後に、兵糧攻めに出た。つまり、彼女に最も有利な条件での離婚調停手続きに踏み込んだ。結果、年金の分割や慰謝料請求などによって彼女が日本に帰国して新たな生活を始められるだけの内容で調停は決着となった。

一方の夫は、想像に難くないよね。多くの日本人男性がたどる道をたどり、金の切れ目が縁の切れ目で破綻した。相手の女は、彼のことを資金面でも年金面でもかなり有望なカモだ、と見立てたようで、色仕掛けで積極的にアプローチしたので、真面目だった亭主はコロリとってしまったけれど、結局、離婚によって文無しになった後は見向きもしなくなった。このご夫婦の場合、終章が近い人生でのこの結果は、お二人共に悔いが残ったと思う。』

次郎『ウーン。厳しい結果ですね。長年寄り添ってきたベテランのご夫婦なら、山あり谷あり、そんなことも有ったよね。という感じで乗り切っていけるような気もするんですが。。』

龍『そうだよな。確かに、俺がこちらでお付き合いしたことのあるご夫婦で、夫が現役時代に海外単身赴任の時に起こった現地妻がらみの騒動のこと等を、アッケラカンと話してくれた奥さんがかなり居るよ。でも、こんな事が有るから、女性陣から見れば男は信じられない程の馬鹿だ、ということになるんだな。』

次郎『確かに。結果が見えているのに道連れにすることは無い。』

龍『愛は盲目か。』

龍『一つくらいは、成功事例も話したいな。』

次郎『有るんですね。少しほっとします。』

龍『この例は、トニーと言うオーストラリア男性とノンと言うタイ女性のケースなんだ。トニーはオーストラリア人だけど、米国の大学を卒業して、最終的には西海岸のシリコンバレーにあるIT関連企業に26年間勤務した後、55歳でリタイヤしている。企業年金も貰っているし、グリーンカード（米国永住権）も持っていて、ハワイにコンドミニアムを持っていて家賃収入もある。つまり、その辺のゴロツキとは違って、金銭面の問題がないインテリタイプの間人と言える。彼は、現役時代に米国人奥さんと離婚していて、リタイア後は単身で世界各国を放浪し、タイにたどり着き、それから1年かけてタイ全土を放浪した結果、チェンマイを第2の人生の移住先と決めた。その時、彼は57歳。

一方のノンは、チェンマイの大学で英語を学んだ後、バンコクに本社がある貿易会社のチェンマイ支店に勤務している。現在は41歳で、彼とは28歳の時に知り合い、同棲してから早13年が経つ。

当時は、ノンがちょうど恋人と別れた時期と重なる。当時の恋人は本社からチェンマイに転勤していたタイの若者だったが、バンコク本社に呼び寄せられたため、泣く泣く離ればなれとなってしまったらしい。

そこへ、トニーが登場し、連日のラブコールによって、彼女も年の差には目をつぶってゴールインしたらしい。

彼らの関係は経済的には依存する部分と独立している部分が共存しているようだ。家賃や食費は彼が負担しているが、現金を渡すことは少ないし、例えば車は彼女自身の金で買っているし、家は買っていない。男側が車買って、家買って、のお決まりコースとは違う。お母さんが近所に住んでいるので経済的支援をしているが、それも彼女の収入の中から出費、という具合に。

それよりも何よりも、お互いに信頼し、愛し合っている事は誰が見ても分かる。やはり、彼女が英語が堪能であることが、大きな支えとなっていると思うな。お互いにラブラブであることを、恥かし気もなく人前で見せびらかすようなカップルなんだ。経済的にも、現在、彼女はチェンマイ支店長の秘書として活躍中で自立できているからね。

しかも、彼は、とてもマメに誠実に彼女が喜ぶような事をきめ細かくやっている姿が良く目に付くからね。多くのタイ人男性が飲む、打つ、買う、DVの4拍子揃ったダメ男達だから、そんなに優しくされたら、年の差は気にならないのかもね。以前、彼女がつくづく言っていたよ。実は自身の父親が絵にかいたような駄目オヤジで、母親を泣かせていた、と。だから、自分が今、母親を助けているんだ、と。』

次郎『なるほど、今まで聞いたカップルとは随分様子が違いますね。お母さんも、自身の経験と照らし合わせても、今の娘の亭主は納得なのかも知れないですね。。。でも、本当に裏は無いんですか？』

龍『ん？。。うーん。そう言われてみれば、無くはないんだが。。でも、これは裏というよりも、当然のご褒美だろう。と言えなくもない。

さっきも言ったように、トニーはハワイにコンドミニアムを持っている。彼はグリーンカードの更新のために、毎年、ハワイまで行ってる。その時に、コンドミニアムの状態をチェックしたり、賃貸契約を更新したりしている。実は、ノンの本音としては、早くそのコンドミニアムを売却して現金化して欲しいんだとさ。でなければ、彼に、もしもの事があった時に、ハワイの物件の資産相続など、考えただけでもリスクの高い交渉や手続きなど難しい話のはず。ところが、彼は、今は価格的に売り時ではない。と、ずっと拒否している。でも、賃貸収入はかなり大きいはずなので、理解はできるけどね。それに彼は健康面、体力面共に、今のところ問題が無いからね。』

次郎『なるほど。トニーは何歳でしたっけ？』

龍『今は70歳だよ。このカップルは29歳差。まあ、最後は大金が転げ込む構図だけを見れば、ヤッパリな。となるんだけれど。そうは言っても、この2人は文句無しのベスト・カップルだよ。』

次郎『いずれにしても、最後は大事なお約束がある、と言う事ですね。』

龍『そうなんだ。これは別の例だけれど、彼らが親しくしていた友人の米国人とタイ女性のカップルの場合、彼は彼女のために家を新築する、と約束していたんだけど、待てど暮らせど、彼が実行に移さないもんだから、最近、彼女は痺れを切らしてドイツ人に鞍替えしてしまった。そして、彼は故郷のテキサスに帰国してしまったそうだ。トニーとノンは、この2人の関係の親密さを良く知っていただけに、この結末には本当に驚いていた。俺もこの二人の事は知っていたから驚いた。

欧米人にも、日本人と同じような話があると言う事だよ。』

二郎『そうですか。欧米人にとっても、タイ女性は手強いんですね。』

龍『そりゃそうだよな。結局、男の人種を問わず、玉の輿でない限り、なんで、若い子が爺さんとくっつくか。という事だよな。』

玉本のように生きたい

龍『次郎も知っての通り、あの玉本が作り上げたチェンマイのイメージは日本人に大きな影響を残した。少女を含む若い女性達に囲まれ、まるでハーレムのような世界に生きていた男。チェンマイとは、日本人男性であっても、そんな夢のようなことを実現できる場所らしい、と。未だに大勢の日本人の頭の中に、このイメージが残っているため、男一人がチェンマイへ行くと聞けば、”はは一、さては女が目て。。。”とくる。でも、これが実態と大きくかけ離れているかと言えば、そうでもないので笑ってしまう。

ところで、次郎、あの玉本が、その後どうなったか知ってるかい？』

次郎『いや、知らないです。龍さんは知ってるんですか？』

龍『実は知っている。

この話は日本には伝わっていないし、タイの中でも公表はされていない。

もう大昔の話だけれど、玉本の話が日本のマスコミで大変な話題になっていた頃、その情報は、一部のタイ政府関係者にも伝わった。でも当時のタイと言えば、いわゆる不良外国人が腐るほど住んでいたため、警察はそんな日本人には全く関心が無かった。

ところがそれから10年以上たってから、麻薬の密輸ルートの捜査線上にチェンマイ郊外に住む、ある日本人が浮かび上がった。秘密裏に彼の身辺調査を始めた結果、この男が、その玉本であることが特定された。逮捕するにあたって、タイ政府は考えた。そして、玉本が麻薬密輸の件で逮捕されて、処罰されると公表するとなると、日本に対する影響は大きいし、しかも日本人のタイという国に対するイメージダウンにつながると判断した結果、公表されなかった。

結局、玉本は重罪犯として逮捕、拘禁、裁判を経て死刑が確定し、瞬く間に死刑執行された。この事実は闇の中に葬られたが、彼が育てた少女達の中から、その後、教師、弁護士、医師などが育った、という美談だけが静かに流されたため、一部のタイ人はそこまでは知っている。玉本は既に過去の人、かつての少女達は今、輝いている、と。』

次郎『え！本当ですか？』

龍『本当だ。驚きの事実だろ？

つい最近、とある筋から入った情報だ。でも、次郎、考えてもみろよ。玉本は、一体どうやって何人もの少女を養い、教育し、立派に育てたんだよ？誰の金で？

麻薬密売という錬金術があったと言う事だ。でも、タイでは麻薬密売は重罪であることを知った上でやっていたはずだから、恐らく覚悟は出来てたんだらうな。

ハーレムと死刑との境目ぎりぎりの所に居た事になるな。10年以上、ハーレムの王様でいられ

た代償としては釣り合っているのかも知れない。』

次郎『そうですか。これは衝撃の話ですね。でも龍さんは、この情報をどこから手に入れたんですか？』

龍『そうだよな。実は、この情報はつい最近、チェンマイの日本領事館筋から流されたんだ。では、何故、今になってリークしたか、だよな。ここからは、俺の想像だ。』

まず、この情報はあまりにも古いため、既に機密扱いが時効になりリークが可能になっていた。ところが玉本についての偏向したイメージを今でも多くの日本人が持っており、ある種の期待に胸膨らませてチェンマイへやって来て、日本人の評判を損ねる行動をやっている老人達が後を絶たないため、この状況に対して一石を投じたんじゃないか、と思っている。』

次郎『なるほど。と言うことは、これは信憑性の高い情報ですね。』

龍『実はそうなんだ。ところで、チェンマイにも夫婦づれのロングステイヤーが徐々に増えてきたけれど、男一人で来るのが今でも大半であると言う事には変わりはないんだ。独り者が、チェンマイに住んで居る場合の最優先事項は女。これに例外は、ほぼ無い。俺の話のほとんどが女がらみになるのは、そのせいなんだ。』

市内のタイ語教室へ行ってみろよ。日本人の爺さん達の多い事。しかも熱心だからな。現地語を学びたいというモチベーションがとても強い。しゃべれないと話にならない、と身につまされているんだな。

でもほとんどの場合は一人の女相手さえ、金の切れ目が縁の切れ目で破綻だから、玉本には遠く及んでいないのが実態。玉本のように、ハーレムを築きたいという願望を持っていても、その道は険しい。

でも、それを実践している男もいる。俺は二人だけだけれど知っている。二人の共通点はズバリ、億単位の自由になるお金を持っているという事。

一人は元医師と言われている。彼はゴルフ場のキャディーの中から好みの女性を5人選んで、一人づつに、車と家を彼女名義で買い与え、生活費を渡して囲い込んでいる。すべて丸抱えなので莫大な金がかかるけれど、金に問題は無く、体力的にも続いているようだ。今はいい薬もあるからな。

もう一人は不動産業の経営者。彼は、例えば、レストランなどに派遣されるキャンペーンガールなどに声をかけ、条件を提示して合意できた女性と付き合っている。彼は自分名義でコンドミニアムを4軒持っていて、そこに彼女達を無料で住まわせ、小遣いを与え、週1回のお勤め以外には条件を付けていないため、彼女達は拘束されず自由だ。もしも彼女が去って行った場合は、次

の新しい女を補充する、と言うやり方らしい。なかなか、うまく考えているよな。』

次郎『いるんですね。。でも、億単位の金を右から左へ動かせるような本当の金持ちでないと無理というのが現実なんですね。。よく判りましたよ。』

龍『でも、ハーレムではなく、一人の女性に一途に、と言うことであれば、1億円用意しておけば10年やそこらは持つかもな。ただし、その周りに居る大家族をコントロールできるという前提付きで。

今は、遺族年金と言うマジックも無いからな。』

次郎『遺族年金て何ですか？』

龍『この話は、少し後で話そう。』

チェンマイよりもミャンマーがいい

龍『チェンマイに住んでいながら、ミャンマーへ足蹴く通っている人間もいるんだよ。チェンマイには綺麗な女性が沢山居るし、遊ぶ場所も沢山有るにも関わらずだ。しかも、当時はビザ無しでは入国できなかったし、チェンマイからの直行便も、ほとんど無かったにも拘わらずだ。旅行会社にビザなど何もかも丸投げで頻繁に通い詰めていた。でも、そこまでして何故ミャンマーに行くのか。その答えは、向こうに待っている女性がいるから。でも、それは商売女なんだけれどな。

彼の言い分は ”チェンマイの女は金だけが目当て。ミャンマーの女は、すれていない。”らしい。

でも、春を売る女が、すれてないと言われてもなー。

その辺をよく聞いてみると、要は年が若い。なんと16歳だとさ。』

次郎『なるほど。』

龍『当時はその女性の向こう側にいる面々が表舞台には顔を出さずに、様子を見ながら、どう展開するかを見守りながら作戦をじっくりと練っていたようだ。でもご本人は最後になるまで、そんな裏があることには気が付かなかった。

ミャンマーはタイよりも遥かに貧しい。しかも、タイよりも数多くの少数民族もかかえている。イギリスの植民地から独立を勝ち取った国民的英雄の娘であるアウンサン・スーチー女史が率いる政党が、最近になってようやく民主政権を立ち上げる所まで来たが、それまでは50年も前に起こった軍事クーデター発生以来、長期軍事独裁政権が続いていた。その結果は世界の最貧国と言う経済状態。でも近年は貧困からの脱却を目指して、海外からの投資誘致にも積極的だ。外貨獲得は至上命題で、海外からの観光客も大歓迎だ。

観光客に対しては、夜のオモテナシにも政権は積極的に動いていた。それは、言わば国策ビジネスの一つであり、そこいらのゴロツキがやっているレベルとは違う。舞台装置もしっかりとしている。接待役の女性が顔見世する劇場や、接待をする場であるホテルも外国人だけしか入れない立派なもの。女性達を管理している連中も専門のプロたち。チェンマイ側とミャンマー側の両方の旅行会社も結託していた。

シナリオ・ライターも居る。例えば、同じ女性を指名してリピートしてくる客が見つかり、個別に最終的な落としどころも含めてストーリーが柔軟に作られる。例えば、次回訪問時は、ミャンマー国内のいくつかの観光地を4泊5日で巡る、まるで新婚旅行のようなツアーのセットなど。時間をかけて、結婚するかのごとき流れへもっていくような事までする。

こんな組織的なプロジェクトの中で踊らされているなんてことを全く気付く事無く、68歳の爺さんは16歳の女の子に本気で惚れて、結婚も辞さず、という流れに乗っていった。

そして、高額の結納金の支払い、新居の建設へと、ほぼ彼らのストーリー通りに進んでいった。結果、ミャンマーの物価からすれば大変な金額を使わされることになった。そして、あるタイミングで、その女性は隠された。彼は旅行社に激しく抗議したが、結局は泣き寝入りしかなかった。国家ぐるみの結婚詐欺事件と言えなくもない。

その後、彼は冷静に振り返ってみて、自分がやっていたことが何であったのか、そして何が起こっていたのかをしみじみ理解したようだ。でも、彼は老いらくの恋に酔っていたし、その2年間は生き生きとしていたよ。女との生々しい自慢話を何度も聞かされるのは、いい加減きつかったけれどね。』

次郎『これまた、シビアな事件ですね。』

日本に帰りたいと思った時もあった

龍『次の例は、家族から絶縁されたために、やむなく、新天地としてチェンマイに流れてきて住み続けた男のお話なんだ。

彼は普通のサラリーマンで、妻も子供も居ただけだけど、女関係が普通じゃなかった。一途に本気で不倫相手に惚れ込んでしまった。この場合、例えば離婚して、お互いの恋を成就できてしまえば、ある意味、それが落としどころなのかも知れないけれど、相手も不倫だったため、結果的には恋の成達は出来ず、しかもその過程で支払った代償が、あまりにも大きかった。彼の妻や親戚からの激しい反乱にあって、離婚だけは成立し、しかも子供の親権は完全放棄となり、最後には全くの孤立無援という結末だけが残ってしまったんだ。』

次郎『ありそうな話ですね。』

龍『そうだな。その後、彼はリタイヤしたのをきっかけに、最初はバンコクに新天地を求めた。そこで、25歳のかたぎとおぼしきタイ女性と、瞬く間に知り合い、同棲を始めた。タイへ来ればこんな人生が有るんだと、一時は有頂天になった。ところが、しばらくすると、突然、目の前に強面のタイ人の男が現れた。いわゆる美人局という役回りのお兄さんが。さすがに彼も恐怖におののいた。要求金額には及ばなかったけれど、取りあえず大金を支払った彼は、脱兎のごとくバンコクからチェンマイへ逃げた。』

次郎『これは、いきなり厳しい洗礼ですね。』

龍『そうなんだ。ところが、逃亡先のチェンマイの居心地はとても良かった。バンコクのような大都会の喧騒やギスギス感がなく、住民は、おしなべて穏やかで、のんびりとしている。物価も安い。バンコクでのショックが大きかっただけに、なおさらチェンマイの雰囲気癒された。

最初に知り合った女性は25歳のビア・バーのダンサーだった。もちろん彼女は玄人だけれど、サービス精神が旺盛で、しかも心優しかった。その内に、週1回のペースでデートを約束する。彼女は出勤前に彼の住むアパートに寄ってくれ、部屋の中で彼一人のためにダンスを踊ってくれて、そして愛し合った。こんな関係でも、日本では考えられない夢の世界だった。ただ、半年後に彼女がチェンマイを離れたため関係は長続きしなかったけれどね。

何人かの女性と付き合った後、最後に知り合った相手は37歳の独身のマッサージ師で、20歳と17歳の子供がいるけれど、彼らは既に独立していた。当初は、月2万円のお手当てで、1年間、同棲していたとのことだった。

でも、そう簡単に事が済むはずはない。まず、彼女の希望にそって、彼のボロの中古車を高級車に買い換えた。そして、それに乗って初の里帰り。チェンマイから3時間ほど離れたすごい田舎

の村へ。すると日本人が来たとき村中が大騒ぎに。親戚縁者など50人くらいが集まって来て、その中の長老が、「同棲しているのなら、仏教の教えに従って結婚しなければならない。」と進言。即、結婚の儀に。両親には結納金として200万円を支払った。

でも彼はとても真剣で、タイでも日本でも入籍することを決意した。もしも自分が死んだ後は、彼女に遺族年金が支払われるように準備しておきたいと考えた。

現在は、日本人の男性側が60歳になる前に申請し、受理されてなければ、その配偶者たるタイ女性に遺族年金は支払われないルールに変わっているけれど、当時はそういう規制が無かったため申請は受理された。

彼女の里が、家畜や鶏が走り回るようなすごい田舎だったので、彼女も親元に住むことをあきらめ、その後も2人でチェンマイで暮らし続けることが出来た。月に1回の里帰りをこなしながら親戚縁者の面倒も見てきた。このまま幸せに最後まで行くかに思えた頃もあったようだ。それでも彼の場合もご多分にもれず、金銭面で徐々に限界が見えてくると、二人の間に隙間風が吹き始めた。そして夫婦喧嘩が日常茶飯事となってくると、彼の頭の中に、「やっぱり日本へ帰るか？」というような考えがよぎってきた。

ちょうどその頃、チェンマイの冬の最低気温が10℃を下回った日に、彼は突然、脳梗塞で倒れ、そのまま帰らぬ人となってしまった。元々、高血圧の持病を抱えていたことが原因だったらしい。彼の骨は日本に受け取り手が居なかったため、彼女によってチェンマイの地に葬られた。そして結局、彼は2度と日本に帰ることは出来なかった。

でも、彼女には厚生年金の遺族年金が入ってきたので、平和で幸せな生活が続いているようだ。』

次郎『そうですか。。悔いが残ったかもしれないですね。』

夜逃げ先がチェンマイ

龍『チェンマイには、色々理由があって、日本に帰りたくても帰れない人達もいるんだよ。この話になると他人事では無いけどね。（笑）』

次郎『フィリピンのマニラや、タイのバンコクあたりには、かなり住んでいるらしいですね。』

龍『そう。でも、チェンマイも例外では無いよ。バンコクよりも奥地の田舎だし、物価も安いからね。中でも、今から話す例は日本で事件になるレベルの事をやって逃亡したような話なんだ。

彼はいわゆるヤクザではないけれど、詐欺まがいの事件を何度か起こしているうちに、だましきれなくなって、金を持ったまま日本国内で夜逃げした経験の持ち主なんだ。

若いころは希望に燃えて、まじめに生きていたようなんだけど、本業がバブルで傾いてから徐々に道を外していった。色んな仕事に手を出してみたけれど、どれも物にはならず、徐々に危ない橋を渡るようになっていった。そして、ある時、産業廃棄物処理の闇請負で大金が入ったのをきっかけに海外逃亡した。この逃避行は、もう二度と日本へは帰れない片道切符だった。そして、3か月後にチェンマイに流れ着いた。』

次郎『いままでの登場人物とはちょっと違いますね。筋金入りですか？』

龍『そうでもないんだよ。根っからのワルでは無い。だけど、まともではないよな。俺が言うのも変だけれど。。。

チェンマイに根を張る覚悟をしてからは、当初はかたぎの商売をやって、それなりに繁盛してた時期もあったんだ。バンコクでは有名なジム・トンプソン・ブランドのタイ・シルクをチェンマイで外国人向けに販売するビジネスは結構当たったと聞いている。でも、元々、その道のプロではなかったし、むしろ経験が少ない素人だったために、長続きしなかった。

チェンマイに落ち着いてから、彼は何人かのタイ人女性と付き合っていたが、ご多分にもれず、誰もかれも金がかかってしょうがなく、長続きしなかった。

そうこうするうちに、当時、ミャンマーから流れて来た若い娘と知り合った。この娘とは相性が合った。しかも、タイ人ほどには金がかからない。ということで、彼は同居して面倒を見ることにした。

とは言え、商売が傾きだしてからは、経済的には何とかしないとイケない、と次第に追い詰められていった。』

次郎『彼は当時、何歳だったんですか。』

龍『50過ぎだったと思う。

追い詰められると、やはり、危ない道へと行ってしまう。タイでは、土地付きの家を外国人名義では買えないけれど、コンドミニアムなら外国人にでも買える。大金を稼ぐ手っ取り早い方法のひとつがこの売買の仲介業。日本からチェンマイに来たばかりの小金持ちにとっては信じられないくらい安く思える物件もある。彼は、詐欺とまでは言えないとしても、マージンにしては大きすぎる差益を何度か稼いだ。しかし、そんな評判は後になって日本人の間に広まってしまって、すぐに限界がきた。

一方、チェンマイでの生活も長くなると、日本人から色々な相談や依頼が来る。その中で、もう一つ、手っ取り早い儲け口が夜の遊びの手引き。特に、日本から遊びに来た旅行者が一番のカモ。チェンマイでは、風俗店に客を連れてきた運転手、つまりポン引きにはタイ人用価格と同額程度のバック・マージンが支払われるから、客さえ見つければ、これはいい商売となる。その分を含めた料金を客が払うけれど、旅行者には相場なんて判っていないので、すんなりといく。夜になると、身なりを整えて、高級ホテルの玄関付近で張っていて、日本人に声をかける。怪しげな人間ではないと信用されれば、話は早い。そもそも金魚鉢と呼ばれるような、より取り見取りのシステムが日本には無いので旅行者は結構満足して帰るようだ。

そんなある時、彼女のミャンマーにいる親戚から小学生の男の子と女の子の面倒を見てほしい、と依頼があった。当初彼は、こんなお荷物は困ったもんだ、と考え込んだ。でもチェンマイの裏社会の連中との付き合いの中で、実は、そういった少年少女の売買が成立する需要と、それをビジネスとして成立させうる仕組みの存在を知る事になる。これは大変な金になる、と一旦実感すると、彼は簡単に危ない橋を渡ってしまった。

ミャンマー側の供給ルートを持てるようになっていただけに、その仕組みへの売却さえうまくいけばビジネスとして成立した。これは、恐ろしくリスクの高いビジネスだけれど、実入りも大きいし、実際は意外とうまく回った。

いわゆる、ロリコン需要というものが世界中にあって、タイは比較的簡単にその需要を満たすことができる国として、その筋の連中からは重宝されている。その実態は聞くだけでもおぞましいものだよ。』

次郎『これは、やばい話ですね。確かに、ぞっとしますね。。でも、ビジネスは順調だった、と？』

龍『そうだったんだ。ところが、彼には実は大きな弱点があった。何年も前から、ビザの問題で大変な爆弾を抱えてしまっていた。ビザ・ランという言葉を知ってるかい？』

次郎『いや、知らないです。』

龍『ビザ無しで、近隣諸国とタイの間を繰り返し出入りすることによって、結果的にタイに長期滞在する方法を言うんだ。2014年に発生した軍事クーデター後の現政権になってからは取り締まりが大変厳しくなったけれど、彼の場合は、それよりもずっと以前に、次回以降の再入国の禁止を命じられていたため、もう5年以上も不法滞在をしていたんだ。』

しかも、2015年に起こった中国新疆ウイグル自治区がらみのバンコク爆破テロ事件以降、外国からの渡航滞在者の身辺調査や不法滞在や不法就労に対する現軍事政権による締め付けが並々ならぬ事態となっていく中、人身売買ビジネスは実行不可能となってストップしていた。そしてつい最近、遂に長期間に及ぶ不法滞在が発覚して、彼は警察に逮捕された。そして間もなく本国へ強制送還となった。帰りたいが帰れなかった日本へ。

でも、この危ないビジネスの事はばれなかった。』

次郎『やっぱり、チェンマイには色んな人がいるんですね。』

山岳民族を支援するためにチェンマイへ

龍『次の例は、ボラアンティアというものを隠れ蓑として使っている。それを、何故チェンマイに行くのかという理由、つまりアリバイ作りのために使っているというお話しなんだ。』

チェンマイに来る人の中には本当の金持ちは少ないけれど、彼は本当の大金持ち。

彼はまだ現役なんだけれど、正月、盆、ゴールデンウィークなどを利用して、年に3-4回、チェンマイに来ている。ハワイにコンドミニウムを持っていて、若い頃は毎年、家族旅行でハワイに滞在するような生活をしてきた。でも、そのうちに、妻や大きくなった子供たちも飽きてきてしまって、一緒に来てくれなくなった。そこで、一人旅を始めた所、チェンマイにはまってしまった、という事なんだ。今ではタイ語が、かなり話せる程に周到な準備もして来ている。

金はうなるほど持っているようで、例えば外貨預金だけでも、5億円を超える資産を保有し、その年間金利だけでも半端じゃないようだ。今から、もう相続税の対策を、アレコレと打っているようなんだ。』

次郎『すごいですね。』

龍『でも何故、そんな大金持ちがチェンマイをそれ程気に入ったのかは、分かると言えば分かるし、疑問と言えば疑問なんだ。彼がチェンマイに来る動機にはいくつかあるけれど、何といても、一番は現地妻に会うこと。日本人がまず宿泊することがないホテルで、滞在中はずっと同宿している。

彼女は、今は30歳を過ぎた山岳民族。ただ、、どう見ても美人ではなく、どちらかというところのようなブスなんだよ。でも彼はご執心で、チェンマイに来ることは年間で、せいぜい数十日だけれど、来た時には彼女にしてみれば莫大ともいえる生活費を渡している。でも来ていない時には、彼女は何をやってもバレない。彼も、そのことは知らないし、不問にしている。我々のような第三者から見れば彼女はとても怪しい。

その一つは、彼は滞在中には彼女とセットで、いつも同じタイ人の運転手を雇っているけれど、その運転手は、どう見ても、彼女のヒモなんだな。とてもかたぎとは言えない遊び人。彼が日本にいる間に彼女が何をやっているのかは甚だ疑問なんだけれども、彼にしてみれば、十分に金を渡しているのだから変なことはやってないはずだ、と信じているようだ。もっとも、夜の商売という意味で言えば、もはや彼女の商品価値はほぼ終わっている年齢、とも言えるけれど。だから、なおさら疑問符が一杯付いてくるんだ。ましてや日本からチェンマイに出発するたびに、”何故、チェンマイへ行くの？何故、そんなにご執心なんだ？” という周りからの質問に直面して苦心しているんだから。』

次郎『確かに、それだけの大金持ちなら行先も含めて、いくらでも、もっと良い色んな選択肢がありますよね。』

龍『少し、話が変わるけれど、これは彼から夕食に招待された時に俺が話した内容の一部なんだ。

ピン川沿いのシーフード・レストランでおいしい料理を食べながら、ビールから始まって、ワイン、焼酎、仕上げはブランディーという豪華ディナーだったな。

その時に、俺はお金を持つことと尊敬の念との関係についての自分の考えを話したんだ。

お金を持つことと、人様から尊敬される事とは対極のような気がします。

一般的に、お金持ちは嫉まれこそすれ、尊敬されることは無いですね。

尊敬される人は、お金とは関係なく、人のためになることを実践していますね。

人間の欲望には段階があって、睡眠欲、食欲、性欲、、、色々あって、最後は、尊敬されたい欲望だと、聞いた事があります。でも、人様から尊敬を得ることは中々難しいなと思います。

例えば、お金持ちは羽振りが良いので、それに群がってくる人は利益を得たいがために利用はしますが、尊敬はしていない。さも、尊敬しているようなふりはしますが。

あるいは逆に、親切そうに、さも、ボランティアであるがごとき振る舞いをしながら、実はその裏で金儲けをしているケースなどは尊敬どころか詐欺師扱いされますね。お金がからむと、世知辛く、尊敬という概念からどんどん遠ざかるだけではなく、トラブルの原因にもなってしまいます。

でも一方で、ボランティアという言葉は甘い響けを持っていますね。ことさら、自分はボランティアをやって、人のために貢献しているんだ。と言われたとしても、私にはなんとなくシックリきません。世界の超お金持ちは、少なからず、ボランティアや慈善事業に貢献しているようですが、その中のいったい何人が世の中から真の尊敬の念を集めた上で死んでいっているのでしょうか。

松井やイチローも相当な金額を慈善事業に寄付しているようですが、超お金持ちがそんなことすらやってないとすれば、周りが許さないというような雰囲気は米国にはあるんでしょうかね。もちろん税金対策という面もあるんでしょうが。ただ、いずれにしても、この二人には、ある種、尊敬の念も含めてファンが熱い視線を送っていますが、それは、大金を寄付しているからではなく、プロ野球という仕事そのものへの取り組み方とか、その結果に対しての評価なんでしょう。結局、お金ではなく、真に、人を幸せにしたり、貢献できた人が、真に尊敬されているんでしょうね。

チェンマイに関わった日本人で言えば、かの玉本でさえ、口減らしにあってた貧困少女達を養い、立派に育てた功績については、タイ人から認められているようです。。。

—

と言った、かなり堅い話もしたんだ。
ところが彼は、この話に飛びついた。

これこそが、彼がチェンマイに行くたびに周りの人間から質問されていた “何故チェンマイへ行く？” に対する答えになるからだ。少なくとも、この時以降、彼はこの線で “何故チェンマイへ？” に対する理論武装が出来たようだ。

例えば、永住権を持ってない貧しい少数民族のために資金援助して、永住ビザの取得や生活援助というボランティアをやるためにチェンマイへ行っている、と。

確かに援助交際だと言えば、その通りだしね。』

次郎『なるほど。』

貧しい学生を支援する里親

龍『この話の登場人物は、ボランティア団体の理事長と言う肩書を持っていただけに、結末がかなり悲惨なものになったんだ。

チェンマイでも日本人が運営する様々なボランティア団体が活動している。その中に、一言で言うと、満足に面倒を見てくれる親族がない貧しい子供達のために、里親を募集し運営しているNPOが有る。その団体の理事長だったのが彼、その人なんだ。当時、すでにリタイヤしており、65歳だった。

彼はそのNPOの代表である理事長職を務めながら2人の少女の里親としても支援活動をしていた。

その中の1人は5年前の12歳の時から面倒を見てきていたが、当時、彼女は17歳の高校生にまで成長しており、大学進学を希望した。彼は彼女の強い進学希望に対して、それを実現すべく親切に対応していた。一対一で直接会って具体的な相談をする事も、たびたびあった。相談場所もNPO施設の中だけに留まらず施設外、そして彼の住居へと拡がっていった。初対面の時は12歳だった女の子が今や17歳の女子高生だ。次郎、どう思う？』

次郎『え？いや。。。彼の住居の中で二人きりになって会話するという状況は、それ自体で結果が見えてしまうような。。。』

龍『そうだよな。こういう状況で聖人であり続けることは無理だよな。

と言うよりも、彼が意図的にそういう状況に持って行った、と考える方が素直だと思う。また彼女にしてみても、彼は少女時代から父親代わりとなって面倒をみてきてくれたオジサンなんだから、信頼感も持っていたし、そこで何が起こっても決裂してしまうことはない。

結局、なるようになって、その後も関係が深まっていった。

あまりにも絵に描いたような展開であり、舞い上がってしまったため、そのうちに彼は自分が今、置かれている立場をほとんど見失ってしまった。

彼女にしてみても、信頼しているオジサンに長年大事にしてもらい、しかも、それ以降、彼からもらえるお小遣いが飛躍的に増えたんだから、お互いにハッピーではあった。

そして時が経つに従って、付き合い方が頻繁になり、外部への二人の露出度が多くなってくると、やがて周辺に噂が広がり始め、騒がしく成っていった。

なかでも、そのNPO内の日本人のご婦人方が牙をむいて、激しい抗議活動を展開するようになった。

”このような破廉恥な行動はNPOの存在意義そのものへの根本的な不信感につながっていく大問題である”と。それは大騒動に発展した。二人の不純な？関係の解消要求、理事長職の退陣要求、公

式な謝罪要求などは無論の事、日本に住んでいる彼の妻へは、手紙によってリークし、夫がやっていることの実態を暴露し、戦線布告し、紛争はエスカレートしていった。

しかし、ご本人の動きは、のらりくらりと動きが鈍かった。理事長退陣も、公式謝罪も拒否し、事実無根を主張し続けていたし、17歳の彼女本人からの被害の申し立ても一切無かった。

そんな紛争の最中に重大な暴力事件が発生した。抗議グループに現地タイ人の暴漢が襲いかかり、2名に重軽傷を負わせた上、逃走した。タイ警察が介入するという事態にまで発展したこの事件。でも、犯人の行方は見つからず、誰かが雇ったのかどうか等も含めて、一切が不明のまま、犯人も捕まらないまま警察は手を引いてしまうという結末となった。この事件は日本でも話題となり、最終的に彼は理事長職を退陣し、雲隠れしてしまったため、真相は今でも闇の中のままだ。』

次郎『うーん。そうですか。世間は甘くないな。でも、彼は筋金入りですね。』

龍『そうなんだ。彼もある種、確信犯だな。ボランティアなんていうアリバイ作りをやってても結果は虚しいな。』

別れ

話し終わった龍は、最後の酒の一杯をグッと飲み干した。
そして、次郎に言い残した。

『人間の心の中には悪魔が宿っている。
多くの人間は自身の理性や感性や知性を磨きながら、その悪魔と戦っている。
でも、他者の中に宿る悪魔は簡単に外部に襲い掛かっていくし、俺にも襲いかかってくる。
俺の中の悪魔もフッと顔を出す事がある。
この悪魔はとてつもなく手強い。』

でも、俺はキリスト教が言っている “汝の隣人を愛せよ” とか、
仏教が言っている “赦す” という概念の中に、本当の事が有るように思っているよ。。。。

次郎、アバヨ。元気でな。』